
金色の蝶

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金色の蝶

【Nコード】

N9095E

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

ある日コンビニへ出かけたニートな俺が金色の珍しい蝶と出くわす。

金色の蝶々。

今俺の目の前を飛んでいる。

住宅街の一角、民家の外に植えられた花の辺りを行き交っている謎の蝶々。

太陽の日差しがその小さな体に当たると、それは強烈な反射光を俺の目に

浴びせてくる。

今職を失いニートをしている俺。

いつものように昼前に起き、食う物が家にないので飯を買ってこようとコンビニへ行く途中でこの蝶と出くわしたんだ。

それにしてもこれは新種の蝶だ。

もしかして、俺は歴史に残るような大発見をしたのかも。

こいつを捕まえて持って帰れば、一攫千金も夢じゃないんじゃないかろうか。

テレビに雑誌に引つ張りだこ。お金が一杯はいつてくるぞ。

取りあえず、それにはこいつをどうにかして捕まえないとな。

うーん、どうやって捕まえよう……。

ぐずぐずしていると、他の通行人に横取りされちまうぞ。

そう思うと咄嗟に両手で蝶を挟み込むという無謀な行いをしてしまった。

この場合、大抵の蝶ならなんなく交わし、飛び去っていくんだろ
うけど、この蝶は何故かあっさり俺の手中に収められる。

捕まえたぞ！！

俺は手を前で合わせたまま、一目散に家に走る。

門を足でこじ開け、玄関の扉を蝶を潰さないように片手で驚づか
みして

もう一方の手で開け中へ入ると、自室にそれを運んだ。

……手を開くと、蝶がぐったりしていた。

力を加減して握っていたつもりが、知らず知らずのうちに力を入れて、握りこんでいたみたいだ。やつちまった……。片手で握る自体無理があつたようだ。しかし、例えこのまま蝶が死んだとしても、その姿は珍しい事には代わりがない。

標本にでもして、綺麗に飾れば永遠にその姿を留めて置くことができるはずだ。

ぐったりした蝶をベッドの上に無造作に置いてみた。死んでも良いと思うと、扱いが途端に乱雑になる。

その蝶を取り囲むようにして体を丸く中に曲げて横向きに寝転んだ。

力なく横に羽を倒している蝶を、寝ながら観察していた。

まだ息があるらしく、触覚がぴくぴく動いている。

このまま息絶えてしまうんだろうか……

できれば治療してあげたいが、生憎蝶の癒し方が分からない。

俺にできる事は、蝶の死を見届ける事くらいか。

そんな暗い予想が突如打ち崩される。

蝶が何かの力が吹き込まれたように羽をバタつかせ起き上がり始めた。

え？息吹き返した？

その様子を目にして、俺は蝶が逃げないようにゆっくり体を起こす。

窓が空けっぱなしなのを思い出したからだ。

しくじった、外の空気をいれるために開けていたんだった……。

ゆっくり両足を床に着くと、素早く体を動かし窓を閉めた。

よし、閉じ込め成功。もうこいつは逃げるできない。

安堵すると、ゆっくり近くの回転椅子に座り、ベッドの上の蝶を余裕を持って眺める。

見ると、蝶は俺の方に体を向き直り、ベッドの上で大人しくいるじゃないか。

ひらひら羽をゆっくり開いたり閉じたりしていた。
部屋の中を飛び回るものだと思っていたのに……。

それにしても、どちらが観察しているのか分からないぞ。
蝶もこちらを見るかのように。俺の方に体を向けたまま動かない。

「おい、その男」

……え？

突然耳に届いたしゃがれた声に、俺は体をびくつかせる。

周りを見渡すが、誰もいない。いやいるはずがない。
いたとしたら、間違いなくそれは泥棒だろう。

だって、父も母も出かけているし、こんなしゃがれた声は持ち合わせていないはずだし。

「どこ見てるんだ、前だよ前！」

え……？

その声の先に視線を落とすと、蝶の姿が無かった。
冗談めかしの、蝶に指を指してみた。

「そつだよ、俺が喋ってるんだ」

蝶が喋ってる！？俺は咄嗟に後ろに飛びのいた。その際、壁の
出っ張りに思いつきり

右腕の肘をぶつけた。ちょうど肘の急所を突いたのか、電撃のよう

な痛みとしびれが左腕を突き抜ける。

眉間に皺を寄せ悶絶する俺。

「馬鹿、びびりすぎだろ」

痛い……。しかし、何で蝶が喋ってるんだ？
顔をしかめながらも蝶に視線を注ぐ。

「しかし、汚い部屋だな……」

お喋りな蝶は、これみよがしに悪口を連ねたてる。

「臭いし……」

「それにしても、お前髭それよ」

言いたい放題だ……この野郎。

「こら、さつきから好きな事言ってるんだよ」

「人の家ですよ」

その言葉を放った途端、少し息を呑む。

怒りに突き動かされ、我を忘れて放った言葉の先にいる存在が蝶だからだ。

さつきまで一人で喋っていたが、俺の言葉にどう反応するか分かったもんじゃない。

こめかみに汗を滴りおとしながら、蝶の動向を見守る。

「ああ？」

「てめえが、花の良い匂いに酔いしれてる俺を、突然捕まえてこの部屋に連行したくせに」

「何いつてやがんだ？」

「この誘拐犯が！犯罪者が！」

うお、凄い……。本気で喋ってる。

しかも言ってることが理になってる、とても正しい事を言っている。

至極当たり前の正論を叩きつけられ、俺は黙ってしまった。
言葉が出てこない。

「何か言えよ、俺が間違った事言ってるか？」

いや、君は正しい。

「おら、なんか言えよ」

かなり憤慨しているようだ。とにかく落ち着いてもらわないと。

「す、すみません、つい、出来心であなたをこの部屋へ連れてきてしまいました」

「とても綺麗な姿をしていたもので」

と、取りあえず搦め手で……。蝶に通じるかな？

「わかりや良いんだよ」

「しかし、やっぱり俺綺麗だよな」

「うんうん、やっぱね」

「ふふふ」

案外単純……？

俺はこのとても扱いやすそうな蝶の反応を見て、大胆に話しかけてみることにした。

「あのー、ところであなたは何者ですか？」

「俺？ 死神だよ」

「え……」

俺はその重い言葉を聞いて体を強張らせる。

死神って……？ あの？

しかし、俺のイメージとはかけ離れている。

大鎌を持った黒いローブをきた骸骨のはずなのに……

「その死神様は今日、この辺りに何をしにきたんですか？」

「あん？ もちろん死人の魂連れにきたんだよ」

「この辺で人が死ぬって手帳に書いてるしな？」

そう死神が仰ると、長い触角を胸の辺りの子袋にいれ、小さな金色の本を取り出した。

とても小さいその本は、中身の文字をみるとしたら虫眼鏡がいりそうだ。

「ええっと、名前は高島田新之助って奴だな」

それって……！俺なんですが……！

ちよっと、この蝶俺が目当てだよ。

いや、死神だ、ちよ、どうしよ、とんでもないの家にに入れてしまった。

取りあえず、彼に俺の名前を知られてはいけない。
話をそらすんだ。彼に仕事を忘れてもらおう。

「ところで、あなたは……」

なに言おうか？こいつになにを言えば……。

俺の言葉を無視して蝶が本を読んでいる。

やばい……。

あの本に俺の顔写真でも張ってあれば

俺の身元がばれてしまう。

こうなりゃ先手必勝だ！

「ああ！」

蝶が何かに気づいたのか大声をあげた。

もう遅い、俺の大きな固いカバンの側面が蝶に向って振り落とされている。

死ね！！

「間違えたわ、人ち……」

グシャ……

「ぐえ……」

蝶は何かを言いかけたが、それを最後まで言い終える前にぺちやんこになって

息絶えた。

抹殺完了！ 俺は助かった……。たぶん、こいつが死ねば俺の死ぬ予定は消えるはずだ

よし、腹減ったし、飯買いに行くか。

俺は危険を取りのぞいた開放感で一杯になって、軽やかに外へ走り出て行った。

——キーーーーーードカ！！

「君大丈夫かい？」

「こりゃ駄目だ……」

バタ、ギューーン

「……………」

——ひき逃げかよ……どうやら、俺はここで死ぬようだ……。

F i n

（後書き）

罰が当たったようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9095e/>

金色の蝶

2010年10月21日21時33分発行